

# 案 内

学会  
大 道  
海 版  
北 出

## 大学のカルト対策

櫻井義秀 大畑昇 編著

カルトが社会問題だと認識されているが、大学（キャンパス）で問題化したのはわりと最近である。正体を隠したり、偽装サークルで勧誘するなどのケースがある。その対策のため大学の枠を超えて09年3月に組織されたのが「全国カルト対策大学ネットワーク」。最初は首都圏の40大学ほどだったが、現在は152大学に増加した。

カルトとは何か、どのような手口で大学に入り込んでいるのかといった基本的な情報から、それを発見した場合の対処法、カウンセリングなど具体的な事例を10人が論じている。真宗僧侶の瓜生素氏は浄土真宗親鸞会に入信した体験を叙述。脱会後はカルト対策の立場から調査に携わっている。これによると勧誘がキャンパス内での個々へのアプローチから、SNSなどインターネットを用いた方法に変化してきたと指摘する。「この勧誘方法の画期的な点は、新入生が『自分から』信者に

対してコンタクトをとる点。すなわち、新入生が自ら選択した方法を作り出しているのだ。そして大学での新入生ガイダンスでこうした勧誘があることを伝える必要があると主張する。それにしても、なぜ学生たちはカルトだと気づかないのか、なぜ途中で抜け出



さないのか、という疑問を一般の人は抱くに違いない。その点については弁護士郷路征記氏が、統一教会との25年にわたる訴訟体験をまとめた論考が参考になる。結論的にいえば、極めてシステムティック（むしろ巧妙か）に築き上げられている勧誘と育成による信者化で、後戻りするのは至難である。そのため脱会には多くの困難を伴う。

重要なのは、カルトに対する情報をより多く持ち、共有しあうことだろう。大学ネットワークはそうした役割を担っている。大学関係者はもちろんだが、移動の季節を迎え、檀信徒を有する寺院住職にはぜひ熟読してもらいたい。（四六判・256頁・価2,520円）